

昭和48年度に発生した森林害虫

やま ぐち ひろ あき
山 口 博 昭
こ いずみ ちから
小 泉 力

(1974. 2. 13 受理)

昭和48年度における道内の森林害虫発生状況を整理要約してみると、表-1のとおりである。

これらの発生状況を見ると、いくつかの特徴的な現象が指摘できる。今後の発生動向、防除対策上の問題点とともに次にかんたんに述べておく。

(1) アブラムシ類の被害は減ったのか?

トドマツ幼齢造林地におけるトドマツオオアブラの被害は、道東、道北の一部を除く全道各地にまんえんし、この10年来、毎年かなりの面積にわたって薬剤防除が実施されてきた。最近ではアカエゾマツ造林地のエ

表-1 48年度森林害虫発生概要

害虫名	樹種	発生地(面積)	備考
トドマツノハダニ	トドマツ	小平町(民林, 3 ha)	苗畑, 薬剤防除。
イヌガヤワタ カイガラムシ	イチイ	洞爺村, 真狩村, 旭川市, 岩見沢市	いづれも庭園樹。
ヒメカサアブラ	トドマツ (アカエゾマツ)		各地の苗畑, 一部造林木。激害木少ない。
エゾマツカサアブラ	エゾマツ		各地のエゾマツ幼齢造林地。
カラマツカサアブラ	カラマツ グイマツ		道央, 道東地方にかなりの被害散見。
オオアブラムシ類	トドマツ アカエゾマツ カラマツ	函館局(319 ha) 札幌局(2,630 ha) 旭川局(372 ha) 北見局(716 ha) 広尾局(578 ha) 道庁有林(3,497 ha) 民有林(1,253 ha) 計(9,365 ha)	トドマツオオアブラの被害が最も多いが、道央, 道東にかけてアカエゾマツの被害(約1,500 ha)も多い。防除面積8,122ha。
トドマツノタマバエ	トドマツ		報告なし。
スギタマバエ	スギ		道南スギ造林地に散見。
マツバノタマバエ	アカマツ	七飯, 亀田, 函館林務署	報告はないがひき続き発生しているとみられる。
クリタマバチ	クリ	松前町(民林, 5本)	その他これまで報告のあった地ではひき続き発生しているとみられる。
カラマツハラ アカハバチ	カラマツ	足寄署(1 ha)	カラマツ採種園。
マツノミドリハバチ	カラマツ	大樹署(49 ha) 広尾町(民林, 60 ha)	広尾では前年にひき続き発生。面積拡大。
マツツアカシンムシ	クロマツ		報告はないが、江差, 桧山, 東瀬棚, 厚賀, 静内, 余市の各署の飛砂防備保安林にひき続き発生しているとみられる。
マツノシン マダラメイガ	マツ類		報告なし。
マツヒメハマキ	ストロブ マツ マツ類		報告なし。

害虫名	樹種	発生地(面積)	備考
コスジオビハマキ その他ハマキガ類	トドマツ	道有林 (275 ha)	昨年度の旭川、芦別地区に続きその周辺全域でも密度低下し、昭和40年ころより始まった大発生も一応終熄したとみられる。
カラマツヒメハマキ	カラマツ		報告なし。
カラマツ イトヒキハマキ	カラマツ		報告なし。
テングハマキ	カラマツ		報告なし。
カラマツツミノガ	カラマツ	森 署 (3 ha)	
マイマイガ	カラマツ	美 瑛 (20 ha) 上富良野 (3 ha) 中富良野町 (25 ha) 富良野市 (18 ha) (民林 計 66 ha)	前年にひき続き局部的に大発生。面積拡大。美瑛、富良野計38ha薬剤防除。カラマツ林内に植栽されていたトドマツも全葉食害の被害。またカラマツ約200本、カラマツヤツバキタイの二次被害で枯損。
ツガカレハ	カラマツ	富良野署 (1,000本) 津別町 (民林14ha)	富良野は苗畑の防風垣で薬剤防除。このほか美幌など各地のトドマツ林で個体数の増加が観察されている。
クワゴマダラヒトリ	クワ	北 村 (民林1ha)	
キマダラコウモリガ	スギ	木古内署 (3 ha)	
トドマツミキモグリガ	トドマツ		各地で散見。
カラマツミキモグリガ	カラマツ		道東のカラマツ林に多くみられる。
スカシバガの1種	サクラ		報告はないが、札幌、夕張、旭川の公園樹に継続発生。
オオスジコガネ	トドマツ カラマツ	森、東瀬棚署 (32 ha) 道有林 (97 ha) 白老町、静内町 (民林16 ha)	白老4ha防除。
ヒメコガネ	トドマツ	朝日署	苗畑
ハンノキハムシ	コバノヤマ ハンノキ他	木古内署 (3 ha) 森町 (48 ha) 長万部町 (3 ha) (民林)	全域薬剤防除。 道南地方では、昭和41年頃より連年発生。
ドロノキハムシ	ドロノキ ポブラ	長万部 (3 ha) 白老町 (2 ha) 苫小牧市 (5 ha) (民林)	全域薬剤防除。 長万部では3年、苫小牧では2年継続発生。
オオトラカミキリ	トドマツ		報告はないが、森、苫小牧地方ではわずかながら被害発生が続いているとみられる。層雲峡で被害木発見。
カラマツ ヤツバキタイ (マツノオオキタイ)	カラマツ	森署 (48 ha) 北見市、帯広市、置戸、小清水、斜里、新得、大樹、浦幌町 (民林 計 24 ha)	森0.15ha防除。 民林も一部被害木薬剤防除。
トドマツキタイ	トドマツ	三石町 (24 ha) 杓形 (49 ha) (民林)	三石は被害木43本 薬剤防除。
ヤツバキタイ その他穿孔虫	エゾマツ トドマツ	弟子屈署 (約1,500 ha) 全道一円の天然林	弟子屈は、昭和47年9月の風害による風倒挫折木(針葉樹約9万m ²)の被害。

ゾマツオオアブラ類の被害も目立ってきている。ところが被害報告を集計してみると、発生面積、防除面積ともにこの1~2年減少してきている。これまでの薬剤防除の効果とも考えられるが、発生が恒常化したために関心がうすれてきたとみられる面もある。これらの害虫の被害を抑制していくためには造林方法の改善が根本的な方法であるとしても、すでに植栽された造林地に対しては十分な保護対策が必要と思われる。かつてのように、手入れ不良、気象害などかんたんに片づけられてしまった不成積造林地をつくらないためにも、あらためてこれらの害虫に注意深い関心を払ってほしいと思う。

(2) トドマツのハマキガ類の大発生は終わったか

昭和40年頃より大発生しはじめたコスジョビハマキを中心とするトドマツのハマキガ類は、トドマツ人工壮齡林を主体に一部天然林も含めて、一時は発生面積が5,000 haにも達したが、昨年度は大発生の中心地とみられる旭川、芦別地方の密度が急減、本年度はその周辺地域の密度も低下して、10年近くも続いた大発生もようやく終熄するに至った。この間延面積にして約960 haの地で薬剤防除が実施されている。この種のハマキガ類は、北米などでは一たん大発生すると10年ぐらゐ継続するといわれていた。この点本道でも全く同様の現象がみられたわけである。これからしばらくは虫の存在にも気がつかないような低い密度の状態、すなわち潜伏発生期が続くであろう。しかし10年先、あるいは20年先には、ふたたび大発生するであろうことは、これまた北米の例からみてほとんどまちがいないといえる。その時の被害は、おそらく今回の比ではあるまい。というのは、その頃には、加害に好適なトドマツ人工壮齡林がはるかに多くできあがっているとみられるからである。この事態を予測して、自然におけるハマキガの密度制御要因についてさらに究明していくとともに、寄生蜂など天敵類の増殖に役立つとみられる広葉樹林の計画的な配置、その残存を図っていく必要があると思われる。

(3) マイマイガ大発生、トドマツも丸坊主

美瑛、富良野地方に、局部的であるがマイマイガの大発生がみられた。おそらく昭和46年より始まったとみられるが、47年度26 ha、48年度66 ha、そして卵塊調査の結果では49年度もひき続き発生することが予想されている。今回の大発生の特徴は、この地方一帯にかなり連続してカラマツ林があるにもかかわらず、その中にとびとびに局部的に異常発生したことである。かつての数万ないし10数万 haという大発生も、こうした形から進展していったのかも知れない。ところで、これら異常発生地で2つの興味ある現象が観察された。1つは、カラマツ林内の一部に植栽されていた約90本のトドマツ造林木(7年生)が、丸坊主に食害されていたこと、もう1つはカラマツヤツバキクイの加害で約200本のカラマツが集団状に枯れていたことである。マイマイがは通常はトドマツの針葉を与えても食害しない。またカラマツはほぼ全葉が食害しつ

くされても枯れないのがふつうで、事実周辺一帯のカラマツ林は丸坊主にされながら、ふたたび芽をふいて針葉が回復している。キクイムシの密度がもっと高かったら、あるいは全林枯れ木の山に化したかも知れない。この2つの現象は、大発生時の異常行動とキクイムシ類の二次被害のおそろしさを物語ってくれたといえよう。

(4) ツガカレハの無気味なうごき

道立林試の上条一昭氏は、近年の森林害虫の発生動向と関連して次のようなことをいっている。この10年来、トドマツのハマキガ類をはじめ、カラマツ、広葉樹のハマキガ類、あるいはシャクガなど小蛾類の大発生が相次いでみられた。これらが本年度影をひそめるとともに、大蛾類のうごきが活発となってきている。マイマイガの大発生もその1つだが、そのほか各地でツガカレハの幼虫がよく目につくようになってきた。原因は分らないが、小蛾類の仲間、あるいは大蛾類の仲間それぞれ大発生のための何か共通な要因があるのかも知れない。

確かに昭和28、29年北見地方にマイマイガが大発生した頃、ほとんど期を同じくして昭和27年に、津別地方において約300 haにわたりツガカレハが大発生している。そして、本年度はマイマイガの局地的大発生とともに、ツガカレハの個体数が地域によってかなり増大していることも確かなようである。本種は大発生するとその被害はマイマイガよりはるかにおそろしい。49年の春から夏にかけて、とくにトドマツ林において本種の発生に注意してほしい。

(5) 風倒後の穿孔虫の被害、15号台風の教訓

昭和47年9月の20号台風により、摩周湖周辺に約9万 m^3 のエゾマツ、アカエゾマツ、トドマツの風倒木が発生した。すでに造材搬出されたものもあるが、なお約5万 m^3 の風倒木の処理が49年度以降にもちこされるという。これら残存風倒木中、とくにエゾマツ類へのヤツバキクイの寄生率は高く、繁殖もきわめて良好である。昭和29年の15号台風による大風害の経験からみて、風害後2年目すなわち49年から立木被害が続発するおそれがある。風倒地周辺にはなおエゾマツ、トドマツの立派な林があり、観光地でもある。また近くにアカエゾマツの美林もある。何よりも風倒木の処理を急ぐとともに、土場丸太を中心に風倒木への薬剤散布が必要と思われる。

(6) カラマツ林の間伐は、いつまで安全か?

カラマツ林の間伐にともなうカラマツヤツバキクイの被害は、現在までのところあまり目立っていない。しかしまだ大きな被害がないからといって、そのまま放置し続けてよいというわけでもない。本年度より道庁を中心に実態調査が開始されたが、これらの調査の進展をまってからとしても、おそらく近い将来、何らかの対策が必要とされる時期がくるのではなからうか。マイマイガ被害林の二次被害の例にもみられるように、本種は決して無視することのできない害虫である。
(林試北海道支場)